

紹介

揖斐高訳注 岩波文庫

『頼山陽詩選』

山口 旬

1 頼山陽の詩を読むこと

本書は、江戸後期の代表的文人である頼山陽の漢詩のアンソロジーとその訳注である。山陽といえは恐らく江戸の文人の中でも最も一般的に名を知られた存在であろう。それはその名著『日本外史』が勤王主義的なイデオロギーと合致して幅広く読者に読まれ受け入れられたことによるのが最も大きい。また、その漢詩も川中島の合戦を描いた「不識庵、機山を撃つの図に題す」（本書四七頁）の「鞭声肅肅夜河を過る」などの印象的なフレーズが人口に膾炙し特に詩吟や剣舞などと結びついて愛好されたことにもよる。詠史詩の勇壮な調子が好まれたからであろう。そういう意味で他の江戸の大詩人たちがほとんど読まれなくなり忘れ去られているのとは大きく異なっている。

しかし、そうした山陽理解が、ある一面に偏向していたことは否めないだろう。山陽理解はその時代性に大きく左右されていた。このような山陽の受容は、江戸漢詩の流れの中に彼を位置づける見方からすると不自然に感じられる。江戸期の詩風は前期から後期にかけて大きな転換があった。古典主義的な古文辞格調派から現実主義

的な清新性霊派という流れの中で時代時代において様々な個性の詩人が綺羅星のごとく多数存在しており、著名度において群を抜いているからと言って頼山陽がその江戸漢詩全体の代表ということにはならない。山陽が生きた文化文政天保年間には漢詩の大衆化が起きた時代でもあり、身分を越えて独立した詩人というべき人物が多く出現した時代なのである。山陽の『山陽詩鈔』や『山陽遺稿』などは、山陽の父の友人で師匠格の菅茶山の『黄葉夕陽村舍詩』と並んで江戸漢詩のベストセラーであったので、一時期を代表する詩人の一人である、というのが江戸漢詩の流れの中での妥当な位置なのではないだろうか。

とすると、山陽を読むという行為は他の有名詩人、例えば菅茶山や六如や柏木如亭や大窪詩佛や梁川星巖、などを読むのとはほぼ等しい態度でまず取り組むのが当然な読み方で、なによりも『山陽詩鈔』そのものを目にすれば、それが当時としてごく一般的な詩集であり、他の詩人の詩集と並行的に普通に読まれたことがわかる。したがって、こうした読み方は言わば当たり前のことなのであるが、山陽の評価は時代のイデオロギーと結びついて為されてきた歴史があり、その延長線上から抜け出てニュートラルに読むことを困難にしてきた。本書はその流れから自由にあくまで虚心坦懐に読んだアンソロジーと言える。訳注者は必ずしも山陽を研究対象の中心にしてきたわけではない。清新派を中心としながらも幅広く江戸漢詩全体、あるいは周辺に至るまで俯瞰した上での山陽訳注である故に、冷静な山陽理解が可能になった。

2 訳注と解説について

選集で最も重要なのは選詩であり、どの詩を選ぶかによって読者の山陽のイメージは大きく変わってしまう。近代における山陽の選集はいくつかあって、いずれも特徴をもったものだが、やはり愛吟されてきた作品ははずせないなどの理由もあって、山陽の詩人としての変遷や人間山陽の人生の流れを理解するという観点で選ばれたものではなかったし、或いはその反動で意識的に過去の愛吟作品をはずすという偏りを免れなかった。その意味で本書は初めてバランスよく山陽詩を選んだアンソロジーになった。

選詩とともに重要なのが詩の配列である。従来の岩波文庫『頼山陽詩抄』が詩体別であったのに対して本書は編年になっている。これは、山陽の人生の流れや詩風の変遷をたどるのに便利であって、訳注者の興味が主にそうした山陽の個にあることを示している。詩体別の編集が詩人の個ではなく、評語や添削なども含めた協同的な営為としての漢詩そのものへの興味であったのと対照をなしている。

頼山陽の略歴は、脱藩出奔から廃嫡、西遊などが人生の転機であったのは比較的よく知られている。本書はそうした略歴の紹介に留まらずに、その書簡などの精査から山陽の内面にあった「数々の磊塊（石のかたまり）」というキーワードを軸にその人生の流れを説明する。その磊塊とは父への贖罪と学問によって名を挙げることとされているが、詳しい検証まで示されなかったのは文庫本の解説という制限の為とはいえ惜しまれる。また、それぞれの時期の詩と

対応が示されていて解説と訳注と相俟ってより深い理解が可能になっている。私生活における、女弟子としての江馬細香との関係に對しての袁枚の影響、また原本に見られる各詩人の評語などから窺える周囲の文人との関係など、山陽は作品だけでなく人生も興味深い人物なのである。

山陽の詩風の変遷で、九州への一年にも及ぶ旅の詩集「西遊詩稿」が一つの頂点を成しているのは古来言われてきたことである。一般的にも旅は詩人を成長させ、所謂「万卷の書を破り、千里の道を行く」のが文人の理想とされる。山陽の師匠格の菅茶山も何度かの旅行で多くの名詩を生みだしている。しかし、山陽の場合そうした一般的な問題とはまた別の面を持っている。絶句から古詩へ変わったという得意詩体の変化である。その要因には友人である武元登々庵の著作『古詩韻範』がある。古詩の形式を極めて合理的に説明した書で、他に類書がない優れた著作である。古詩は、絶句・律詩など近体詩と異なり形式的な束縛がほとんどない形式であるが故に、つかみどころがなく冗漫に流れやすい。そこに様々な手法を提示する書なのである。山陽はこれによって古詩に開眼したのである。一年を超える九州への大旅行と古詩への開眼という二重の意味で、山陽の詩風は転換したというのが本書の重要な指摘である。

山陽は歴史書『日本外史』を著し、詩においても詠史詩を数多く詠んでいる。その歴史叙述には当然なんだかの歴史観が必要だが、山陽は歴史の流れを「勢」という時運の流れと捉えて、『日本外史』の記述も想像力豊かに歴史の具体相を描いた。詠史詩における歴史

叙述も、それと同じように描いたのである。たしかに山陽の詠史詩は正面から歴史に取り組んだもので、歴史の細部や裏側を穿つような詠史の方法とは一線を画している。

山陽の漢詩の全貌を知るには前述の詩集や後に編集された『山陽全書』などを見なくてはならないが、膨大な量の山陽詩を読破するのは困難であり、適当な量の選集と訳注が手に入れやすい形で出版されるのが望まれていた。ゆきとどいた解説とともに、そのような期待によく応えているのが本書なのである。

(二〇一二年六月一五日発行 文庫版 三六六頁 八四〇円)

(やまぐち・じゅん 大学院博士後期課程在学)